

2005.1.15

村木新次郎 (同志社女子大学)

smuraki@dwc.doshisha.ac.jp

1. 「漢語」の範囲

漢字を要素とし、音読されるもの (中国から借用したもの + 日本でつくられたもの)

2. 先行研究

松下大三郎(1926)、山田孝雄(1940)、池上禎三(1954)、浜田敦(1963)、鈴木重幸(1972,1980)、宮地裕(1973)、森岡健二(1982,1994)、野村雅昭(1998)、村木新次郎(2002,2004a,2004b)

3. 「漢語」の品詞性(村木 (2004a))

(a) 借用語としての漢語が日本語の単語として定着するには、日本語の文法的な性質をもたなければならない。

(b) 品詞は単語の文法的な特徴にもとづく分類である。文法的な特徴は統語論的な特徴と形態論的な特徴とからなる。

統語論的な特徴は、どの単語にもあり、形態論的な特徴に優位する。

(c) 単語とは、(典型的には) 固有の語彙的意味をもち、それが文法的な形式 (語形) をとり、文の部分となる性質をそなえた言語形式であるとする。

(d) 「漢語」は、日本語の中で、さまざまな品詞として定着している。さまざまな品詞とは、名詞、動詞、形容詞 (いわゆる形容動詞や連体詞もふくむ)、副詞、接続詞、陳述副詞、後置詞、従属接続詞、感動詞である。

(e) 日本語の中での漢語には、中国語の特徴である同形で多品詞にわたる特徴 (「兼類」) が多くみとめられる。

動詞にあっては、「-する」「-す」といった派生辞をしたがえ、固有の合成語をつくるので、形態論的に他の品詞とまぎれることはないが、名詞・形容詞・副詞などにあっては、語幹部分が共通しているので、語形だけでは、品詞の区別がまぎらわしい場合がある。

「人権の問題」 vs 「緊急の問題」

「客に／緊急に／直に 対応する」

ある品詞と別の品詞との異なりは連続的といえるところがある。つまり、ある品詞と別の品詞とは、つねに完全に排他的とはいえないのである。品詞間のかさなり、あるいは連続性は、臨時的な品詞の転位を可能にしている。

(f) 漢語には、統語上のゆれも形態上のゆれも相対的に多い。今日、各種のデータベースの利用が容易になったので、漢語の使用の実態を調査しやすくなった。個々の漢語の詳細な文法性の記述がのぞまれる。あわせて、日本語の品詞体系のみなおしも必要である。

4. 「漢語」の特異性

固有語（和語） v s 借用語（漢語 + 洋語）

1 単位の不安定性

1. 1 単語か、形態素か

(a) 擬似語基

擬似 -体験/-家族/-患者/-検査/-衛星/-汚物/-餌

厭世 -観/-主義/-哲学/-気分/-的

学際 -色/-系/-領域/-研究/-大学院/-間/-的

機動 -隊/-車/-力/-性/-捜査隊/-警戒隊/-的

具体、民主、国際、客観、本格、合理、……

(b) 連体専用形容詞 [cf. 区別詞/非謂語形容詞]・語基

遺愛 遺愛の品/文化財/琵琶 -品/-集

遠隔 遠隔の地 -地/-操作/-学習/-授業システム/-医療支援

遠来 遠来（から）の友/人たち/観光客 -者/-組/-賞

懐旧 懐旧の情/念/心/ことば -記事/-話/-的

(c) 連体専用形容詞

「一介の（研究者）」「一陣の（風）」「一縷の（望み）」「一連の（出来事）」「応分の（協力）」「会心の（一局）」「希代の（悪党）」「巨万の（富）」「諸般の（事情）」「浅学の（身）」「達意の（文章）」「厳寒の（北海道）」「飽食の（時代）」「不退転の（覚悟）」……

1. 2 単語か、語結合か

臨時一語（即席一語）<略>

「全国各地」

「授業開始」

1. 3 接辞の問題

約・3キロ 故・小渕首相 翌・6月 各・大学 当・銀行 本・事務所

全・人類 新・委員長 別・次元 等・間隔 同・方向 多・目的 未・処理 不・評判

教員・専用 住宅地・特有 効果・満点 意欲・満々 大人・同様 勘当・同然 とおり・一

遍 迷惑・千万 荒れ・放題

2. 品詞の兼務（多品詞性）

「不覚」

名詞 「一生の不覚」

陳述副詞 「不覚にも」「不覚ながら」

? 形容詞 「不覚の大失点/一敗」

「不朽」

(1) 不朽の音楽/テーマ/貢献/…… 不朽に輝く 不朽だ

(2) 今、晩秋の山がその愛を代弁すると歌った。人間の温かさの不朽を歌う作。(朝日新聞 010123)

「難儀」

(3) 「毎回ヒット作を出すのは難儀なこと。当然リスクもある」。(毎日新聞 040409)

(4) 時が過ぎ、映画化に際して女優探しに難儀していた監督の荒戸源次郎は、車谷からその手紙を見せられる。(毎日新聞 040127)

(5) 山田文子(82)は「自分たちで難儀をして建てただけに思い出がいっぱい」と話す。(毎日新聞 030928)

名詞・動詞・形容詞：損、得、楽、苦勞、困難、失礼、退屈、心配、感心、難儀、反対、貧乏、不便、満足、無理、乱暴

3 メタ言語的な用法

3. 1 対象化

(6) さらに、「画一」に関しては、子供たちは、同じかばんを持たされ、同じ制服で、体操着で生活をするのが強いられていますよね。(産経新聞 95.07.02)

(7) 建て替えは、管理や所有権などを定めた区分所有法に基づき、補修に「過分の費用」がかかる場合で住人の5分の4以上の賛成があれば可能だ。しかし、「過分」についての具体的な規定はなく、業者によって補修の算定に差が出ることもある。(朝日新聞 01.12.26)

(8) 利発で男前、喧嘩(けんか)も強くてカッコイイ栄二。さぶはといえば誠実なだけで「愚鈍」を絵に描いたような若者だ。(読売新聞 01.09.30)

(9) 膠着(こうちやく)状態が続く拉致問題で、北朝鮮がまた、帰国した拉致被害者五人に対し「誠実」を装った不誠実な対応を見せた。(産経新聞 03.12.17)

3. 2 列挙(並列-比較)

(10) 適資産とされた長銀の子会社についても、「将来、責任追及のタネとなるケースが多い」として、再度、適、不適の判断を委員に求めている。(産経新聞 010608)

(11) ごみの分別はせず、可燃も不燃もゴミはゴミ。(佐賀新聞 030319)

(12) 座禅や修行、読経という求心的な心身合一の他方で、ロックの爆発的陶酔の遠心的で拡散的な自己表現を知覚する主人公、浄念は、乱調し、分裂するままと生き、求心と遠心の自己の統一を肯定するのであるが、私はここに、現代の若者が、宗教的希求をもちながら、他方で全存在的な音楽による自己発現を考える象徴的なドラマが描かれているように思った。(産経新聞 011119)

(13) 「既遂や未遂にかかわらず、婦女暴行は悪質事件に間違いない。身柄を引き渡してもらおう罪だと解釈しているんだが……」(毎日新聞 02.12.06)

(14) 私撰に比べ国選の報酬が非常に少ないなど制度の問題もある。(毎日新聞 03.02.09)

(15) 「その貧しい極小に、世界のなんらかの構造という極大は映るかもしれない」(産経

新聞 93.05.01)

4. 形態上のゆれ

(16) 初会合で本部長の麻生渡知事は「公務員の原点に返り、県民に信頼される公明正大な行政の仕組みに変えるよう、全庁挙げて取り組みたい」とあいさつした。(佐賀新聞 970315)

(17) 呂選手は「現在は自分自身の公明正大さを信じて気分を変えるよう努めている」と明るく話し、一九九六年のアトランタ五輪に出場する意欲を表明した。(佐賀新聞 94120)

(18) 明正暗奇とは公明正大を前面に出して威信を伸張する一方、陰では計略をめぐらせ、その陰の力で統治の基盤を固めることだ。(佐賀新聞 961007)

(19) 首相も首相だが、その軽率を(軽率さ／軽々しさを／*軽々しいを)そしる批判の不毛さにもウンザリするという雰囲気の中で、20世紀が終わろうとしている。(毎日新聞 001222)

(20) 50代で不本意な出向をする先輩たちを見届けるうち、徐々に気持ちが固まった。(毎日新聞 030320)

(21) 77歳で不本意の引退表明をした粕谷茂元北海道・沖縄開発庁長官は、中曽根と宮沢喜一元首相の残留を求めながら(毎日新聞 031025)

参考文献

池上禎造(1954)「漢語の品詞性」『国語国文』23-11(京都大学国文学会)

鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』(むぎ書房)

鈴木重幸(1980)「品詞をめぐって」『教育国語』62(むぎ書房)

野村雅昭(1998)「現代漢語の品詞性」『東京大学国語学研究室創設百周年記念国語研究論集』(汲古書院)

浜田 敦(1963)「漢語」『国語国文』32-7(京都大学国文学会)

松下大三郎(1926)『改撰標準日本文法』(中文館書店)

宮地 裕(1973)「現代漢語の語基について」『語文』31(大阪大学国文研究室)

宮島達夫(1987)「単語の本質と現象」『教育国語』74(むぎ書房)

村木新次郎(2002)「第三形容詞とその形態論」『国語論究 第10集 現代日本語の文法研究』(明治書院)

村木新次郎(2004a)「現代日本語における漢語の品詞性」『日語研究』2(商務印書館)

村木新次郎(2004b)「漢語の品詞性を再考する」『同志社女子大学日本語日本文学』16(同志社女子大学日本語日本文学会)

森岡健二(1982)「日本人の外国語受容」『講座日本語学1』(明治書院)

森岡健二(1994)『日本語文法体系論』(明治書院)

山田孝雄(1940)『國語の中に於ける漢語の研究』(寶文館)

資料 朝日新聞、毎日新聞、産経新聞、佐賀新聞